



▲くねくね〜♪くねくね〜♪続く塩の道♪

塩 土佐塩の道30kmうおーく
でつないだ命の道を歩いて体験

5月15日(土)第13回土佐塩の道30kmうおーくが開催されました。昔、塩を届けるために使われていた、赤岡町から香美市物部町を結ぶ道を歩くウォーキングイベントです。1年越しに感染症対策をしての開催となり、約100の方が参加されました。

登り降りの多い山道に「昔の人はこの山道を塩を背負って歩いてたなんて・・・!」と驚きの声をあげつつも、名物の竹べんとうや休憩所で流れる塩の道の歌、歩くことでしか体感できない自然を皆さん楽しまれました。

み 山北地区まちづくり協議会主催 ウォーキング大会
みかんの花に誘われウォーキング

5月1日(土)、山北地区まちづくり協議会主催によるウォーキング大会が開催され、約80人がミカン畑の広がる農道2.3キロを歩きました。

これは、新型コロナウイルス感染症が広がる中でも、できる範囲で住民の交流機会を作ることと、山北の基幹産業である果樹栽培の歴史を学んでもらおうと、企画されました。

参加者は、みかんの白い花と甘い香りを楽しみながら、アップダウンの激しいコースを満喫しました。



▲五感で楽しむウォーキング大会!

地 令和3年度香南市更生保護女性会野市支部総会
地のためにがんばるボランティアたち

6月1日(火)のいちふれあいセンターで、香南市更生保護女性会野市支部総会が行われ、その中で保護司会との研修会が行われました。更生保護女性会とは、非行や犯罪に陥った人の立ち直りの支援など、更生保護に協力するボランティア団体です。

今回の研修会は初めての試み。代表の公文美代子さんは、「更生保護女性会と保護司会が連携をとることにより、より幅広いサポートにつなげることができる。今後もこのような機会を増やしていきたい」と話してくれました。



▲会員も随時募集しています

無 オキノタユウふれあい教室
無人島長平の命を支えた鳥 オキノタユウとふれあい教室

5月15日(土)、山南防災コミュニティセンターで無人島長平の命を支えた鳥、オキノタユウ(アホウドリ)とのふれあい教室を開催し、幼児をはじめ約20人が参加しました。

読み聞かせグループ「ぶっくぶっく文庫」による紙芝居「長平ものがたり」で江戸時代の漂流民・野村長平について学んだあと、保護活動を行っている山階鳥類研究所(千葉県)の賛助会員・門脇位明さんから「アホウドリと言う失礼な名前ではなく、古くからの地方名:オキノタユウ(沖の大夫)と呼ぶ動きが広がっている」などの説明がありました。



▲模型を抱いた子どもたちは「でっか〜」と驚いていました

色 のいちあじさい街道
鮮やかなあじさいがお出迎え

今年も新型コロナウイルス感染症の影響により、野市のあじさい街道にて毎年開催されるあじさい祭りは中止。しかし、例年通り西佐古から父養寺までの1.2kmに、約19,000株のあじさいがきれいに咲き誇りました。

野市のあじさい街道は、県内でも人気のあじさいスポット。住民の方だけでなく、市外からも多くの方が訪れます。コロナ禍でも変わらず、訪れた人に癒しを与えてくれるあじさい。今年も、気が重い梅雨の時期に彩りを添えてくれました。



▲住民の方がお手入れしてくれています

香 こーにゃんマンホール蓋が完成
香南市の人気者がマンホール蓋に!

市の魅力をPRするマスコットキャラクター「こーにゃん」と、県立のいち動物公園の人気者で、よく動くことで有名な「ハシビロコウ」をデザインしたマンホール蓋が完成しました。市民や多くの方々に下水道事業について、関心を持ってもらうために作られました。

また、下水道事業について関心を持ってもらうだけでなく、観光に訪れた方々に市内めぐりを楽しんでもらいたいという思いからデザインされたもので、香南市の玄関口である市役所前とのいち駅前の2カ所に設置されています。



▲この可愛いマンホール蓋、ぜひ探してみてください!

電 四国電力送配電株式会社 香南市消防署 合同研修訓練
力のエキスパートから救出技術を学ぶ

5月17日(月)香南市消防本部と四国電力送配電株式会社が高所救急の合同訓練を行いました。

前半は、同支社山田事業所の所員が配電設備等に関する座学を行い、電気設備の安全に関する知識を消防隊員に伝授。座学終了後、実技演習を行いました。実技演習は「地上7mで電気工事をしていた作業員が熱中症で動けなくなる」という想定で実施。隊員はアドバイスを受けながら、高所から傷病者を救助する訓練を行いました。配電設備のポイントや危険性を実際に視認しながら体の使い方やコツを学びました。

今回の訓練は、香南市消防本部から協力を依頼し、同社がそれを快く承諾してくれたため実現。香南市消防本部は、はしご車等を保有していないため、初めての訓練となり、今後の救助活動に生きる経験となりました。



▲高所作業車を使用した救助訓練

